1 9 4 7

創作代表選集

昭和二十二年度版

創作代表選集

銓衡委員

河上徹太郎
里見弴
高見順
德永直
廣津和郎
平野謙

創作代表選集第一卷

昭和二十三年八月二十五日　印刷
昭和二十三年八月　三十日　發行

定價　百五十圓

編纂者　日本文藝家協會
代表者　竹越和夫

發行者　東京都文京區音羽町三ノ一九
尾張眞之介

印刷者　東京都千代田區神田錦町三ノ一
井關好彦

印刷所　東京都千代田區神田錦町三ノ一
大同印刷株式會社

發行所　東京都文京區音羽町三ノ一九
株式會社　大日本雄辯會講談社
（日本自由出版協會々員）
振替口座　東京三九三〇
電話(33)代表　一三一番　九段　八六番

（林製本）

終戰二年目の文學概觀

伊藤　整

この作品集が代表してゐる一九四六年夏から一九四七年夏は、終戰後滿一年目から二年目にわたつてゐる。戰爭終了後筆をとりはじめた諸作家が、やうやく落ちつきと、日本の精神文化の方向にそれぞれの見とほしを持ちはじめた時期にあたつて居ると言つていいであらう。

左翼の作家たちからは、道義的なものが以前より明るくなつた陽の光のもとで改めて提出された。それは宮本百合子、中野重治などの、過去の實踐と現在將來の、各種の場における道義のありかたの測定のやうな仕事であつた。戰後の社會において、道義のあるべき形を、この比較的早い時期に、ともかく考へたといふことは、精神の世界において、重要な據點となつた。つまりその種の道義の形を批判したり、疑つたり、改めたりする可能性がそこから生れたといふことである。同じ舊左翼出身の作家のうち、佐多稻子、平林たい子、德永直の三氏は、論理的にはこれ等前衞の作家と背反しなかつたが、作品の實踐においては一歩退いて人間性一般の反省から歩み出さうとする愼重な態度をとつた

やうな印象を與へた。

これ等の作家は主として、その頃から活動しはじめた「新日本文學」をよりどころとした。この雜誌は志賀直哉、廣津和郎などをも顧問のやうな形で包含した廣い組織を持つたものであつたが、その實際の活動は、中野重治、窪川鶴次郎、岩上順一などの所謂正統派的プロレタリア文學理論家の意見に基礎をおいた。後に「近代文學」から小田切秀雄が脫してこの派に參加し、作品活動における主體性の問題を提出した。なほこの派に屬する文藝理論家では、藏原惟人、除村吉太郎、瀨沼茂樹などが戰前の理論的業績をまとめて發表しあるひは改めて論索をするところがあつた。

雜誌「近代文學」は、「新日本文學」が代表するところの戰前からのプロレタリア文學の理論を、近代人のエゴの場において心理的な安定感から訂正しようとする傾向を持つ批評家の集團として、戰後出發した。近代の日本文學の再檢討とともに現代小說を方法論的に考へようとする意圖が顯著であつた。さういふ點でこの雜誌の平野謙、荒正人等が中野、岩上、小田切等とはげしい論爭を行つた。外に佐々木基一、本多秋五、福田恆存等がこの雜誌で仕事をした。一九四七年夏頃から、同人を增加して、新しい作家の理論的な支點たる觀があつた。

老大家では前年多くの作品を發表した永井荷風が沈默し、志賀直哉が「蝕まれた友情」を書き、谷崎潤一郎が「細雪」を書き續け、宇野浩二が「思ひ草」その他を、里見弴が「みごとな醜聞」を、室生犀星が「上野」その他を書いたが、概して積極的な動きはなかつたと言ふべきであらう。

昭和初期からの作家では林芙美子、石坂洋次郎、林房雄、芹澤光治良が健筆で多くの作品を書いたが、横光利一は「夜の靴」に集められた手記的作品の外ほとんど書かず、川端康成、尾崎士郎も作品は少なかつた。中野重治は論索が多く、僅かに「五勺の酒」があつて、批評の對象となつた。宮本百合子は「二つの庭」で自傳的な小説を書きはじめて最も多くの論議を起した作家であつた。井伏鱒二は「引越やつれ」その他を圓熟した調子で書き、網野菊は手がたい私小説を、平林たい子は「からいふ女」その他を、佐多稻子は「私の東京地圖」の連作を、德永直は「妻よねむれ」その他を書いたが量的に多いとは言へなかつた。

この一年間に、昭和十年頃から書きはじめた作家が、年齡的に四十歲前後に達し、それぞれの作風の圓熟期に入つたためか、もつとも目立つて作品活動をしたやうに思はれる。丹羽文雄、坂口安吾、高見順、中山義秀、北原武夫、舟橋聖一、石川淳、太宰治、上林曉、川崎長太郎、火野葦平、織田作之助、田村泰次郎、井上友一郎、外村繁、澁川驥、眞杉靜枝などの代表する層である。

この時期の作家は、戰前に一應仕事をして來た人々であるが、戰爭の間、あるひは沈默し、あるひは歪められた仕事をしたといふ經歷を持ち、戰後、その本來の仕事の場に立ち戻つたのであるが、戰後それぞれに作風を發展させて、積極的に自己を作品にうち出したといふのが共通の特色であつた。各作家について詳論するいとまはないが、肉體的に人間をとらへるといふ立場を取つたものとして、世上の論者は丹羽、坂口、舟橋、田村、織田等の作品を論ずる習慣であつた。丹羽の「厭がらせの年

齡」と田村の「肉體の門」は特徴ある代表作と見なされた。また上林、川崎、新田潤、澁川、外村等の系統の作家は、大正時代以來日本の小說の傳統の道となつた私小說系統のものを多く書いたことによつて、「私小說派」と呼稱された。しかし坂口の「花妖」、太宰の「ヴィヨンの妻」、高見の「我が胸の底のここには」、石川の「燒跡のキリスト」などのやうに、新しい小說の型をうち出さうとする試みを持つたものとして特に注目された作品があつた。またそれぞれの意味である技巧派的な藝術至上論的立場をとつた作家として北原、中山、井上などが考へられてよいだらう。おほむねこれ等の作家は確定せる舊道德にも、左翼的道德感にも疑問を提出するやうな方向で人間性の模索をしようとした。

その他の既成作家、石川達三、阿部知二、尾崎一雄、深田久彌、荒木巍、小田嶽夫、堀辰雄、豐田三郎、野口富士男、原民喜などは疎開、病氣その他の理由によつて、この時期にはあまり作品活動をしなかつた方に屬する。

この時期に新人が目立つて現れた。梅崎春生、椎名麟三、熱田五郎、野間宏、中村眞一郎、埴谷雄高、三島由紀夫、大日向葵、小澤淸、武田泰淳、船山馨その他である。これら新人たちは、既成作家の多くの人生派的な態度と違つて、何等かの形で觀念的又は藝術至上主義的な傾向を持つてゐた。

目次

厭がらせの年齢　丹羽文雄　一
肉體の門　田村泰次郎　四三
みごとな醜聞　里見弴　七九
肉の火　舟橋聖一　九九
鬼子母神　平林たい子　一三九
顏の中の赤い月　野間宏　一四一
夏の花　原民喜　一七五

假面天使　豐田三郎　一九三
寒い窓　熱田五郎　三二
義妹　中村地平　二七五
五勺の酒　中野重治　二九三
終戰二年目の文學概觀　伊藤整
あとがき　廣津和郎
主要雜誌掲載作品目錄（自昭和二十一年九月至同二十二年八月）

裝幀　吉村力郎

厭がらせの年齢

丹羽文雄

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongb

夜の便所へ、廊下を行くと、「どなたですか」出しぬけに必ず聲がかかつた。靜かな聲で、待ちかまへてゐたといふほどではないが、おどろいて寢とぼけた調子とも違つてゐた。宵から一睡もしてゐない、冴えた頭から出る聲である。聲だけで、その部屋に誰かがゐるといふ感じは少しもあたへないのである。闇の中から、聲だけがぽかりと抜けてくるやうであつた。闇の中でも、年をとつた女の聲調は紛れもしないのである。ぎよつとさせる。そこにうめ女が寢起してゐるといふことは忘れてゐないにしても、不意を衝かれる。「あたしよ」通行人はいちいち自己釋明をしなければならない。それが孫娘の仙子や瑠璃子の場合なら、何でもなく通るのだが、伊丹の時には、一と言の挨拶もして貰へない。無視される。しかし、無視されるだけならその夜はうめ女にとつて運はよいのだと言はなければならない。或る夜の如きは、そこを通ると必ずぎいと鳴る廊下の或る箇所のやうに、「どなたですか」と聲をかけると、聲音はぴたりととまつた。

「わしだよ、婆さん、何か用かね」

うめ女としては、聲音の主に一と言の返事をして貰へば、氣はすむのである。いや、返事も當てにはしてゐない。そこに足が來れば、いかなる場合にも、ぎいと鳴る廊下の軋りのやうに聲をかけるにすぎないのだつた。闇の六疊の牀で、うめ女は背を丸めて、石のやうに動かない。聲をかけたくせに、自分の口がさう動いたといふことさへ、はつきりと意識に置かないのである。

「何か用かね、婆さん?」うめ女はだまつてゐる。言ふことは、もちろん何もない。「やり切れんよ、婆さん、自分の家ぢやないか。ここはわしの家ぢやないか。自分の家のどこを歩かうと、わしは誰にも許可を得る必要はないんだ。いちいち咎められて、たまるものか。第一婆さんは、いま何時だと思ふんだ。眞夜中ぢやないか。夜になると、夜どほし目をさましてゐて、晝間は死んだやうに睡つてゐる。まるで盗人だ。氣味の悪い、ぎよろ目で、みんなが寢靜まつてゐるこの家の中の樣子を伺つてゐる。みんなの寢息をうかがつてゐる。その恰好を考へただけでも氣持が悪くなる。夜はみんなと一しよにおとなしく睡るんだ。年寄りなら年寄りらしく、もう少し可愛げのあるやうに振舞つて貰ひたいんだ」

たださへ靜寂な眞夜中に、聲を張りあげて極めつけたので、家中のものが目をさましてしまつたのは仕方がない。案外、隣家にも聞えたらう。隣家といつても、生籬と一間の道路をへだててゐるだけに、時々隣家で便所の戸を閉めたり、廊下を歩いたりする眞夜中の音を、自家のやうに錯覺をすることがあつた。伊丹がぶりぶりして寢室にかへつて來ると、「どうしたの、お婆さん?」と、仙子が枕許のスタンド・ランプをともしてゐた。

「不愉快だ、自分の家といふ氣がしないんだ。あの婆が、舌をぺろりと出してゐるのがよく判るんだ。狸婆め、いやがらせをしてゐるんだ。何もあの婆に、いちいち許可を得て、便所に通はなければならないといふ道理はないんだよ」

「退屈だからお婆さん、何となく聲をかけてみたくなるのよ。一と晩中起きてゐるんだもの」

「お前は身内だから、何でもなく思へるのだらうが、わしには萬事がいやがらせとしか思へないのだ。猫被りぢやないか。ぬすつと婆ぢやないか。ひとが見てゐるところでは、歩行も難儀らしく、切なさうに、よたよたと、足をずつて歩いてゐるが、誰も見てゐないとなると、しやんと腰をのばして、とつとと歩いてゐる。壯者のやうにしやんと歩いてゐる。誰かに見られると、とたんに、立つてゐるさへ、やつとの思ひだといふ芝居をしてみせ

るのだ。わしには耐へられんのだよ。ちよつとでも人目がないと、この部屋にしのびこんで、引出しをあける。手あたり次第に盗んでいくんぢやないか。わしはうちに泥棒を養つておくだけ、氣持は寛大ではないんだ」

「だけど、もう八十六歳よ。昔からの癖で、ひとにものをやることが好きだつたから、しよつ中何かを持つてゐたくて、あなたのものを取つたのだけど」

「わしの財布から、金を盗んだ」

「子供にかへつてゐるのよ」

「冗談ぢやない、あの小さなからだの中には、八十六年間の悪業の澱がこりかたまつてゐるんだ。金が欲しけれや欲しいといへばよいぢやないか。誰もやらないとは言はないよ。それを默つて盗むといふ根性が、わしには我慢が出來ないのだ。何かやる相手がゐなくなつてるのに、やはり盗人根性は直つてないぢやないか。美濃部が疎開にかこづけて婆をこちらに押しつけてよこしたのも、あそこでも我慢が出來なかつたからだ。第一あの婆のために、お前ら姉妹は年中いさかひをやつてるんぢやないか。たらひまはしにして、たらひをまはされた家が、家庭をめちやくちやにされて、――癌だよ。あの婆が生きてゐる間は、お前らは安心して姉妹が愉しく交際が出來ないんだ。はふり出してやるがいいんだ。明日にも、外につき出してやるがいいんだ。いま時は、誰だつてあそんで、何もしないで食べてゐることは出來ないんだ。働かざるもの食ふべからずぢやないか。野倒れ死にするなら、死ぬのがいいんだ。わしは、ふつと自宅にかへるのが嫌になると、したくもない宿直をやつた方がいいと、度々會社で泊つて來るんだ。自宅にあの婆がゐるかと思ふと、自宅にかへる氣もしなくなるんだ」

「働けたつて、それや無理よ。それに追ひ出したなら、お婆さん、あなたの名を言ふわ。美濃部の名をいふわ。養老院に入れるにしたつて、こちらに扶養能力がない場合に限るんだから、斷られることは極つてるでせう」

「さういふことを、お婆は、ちやんと計算をしてゐるんだ。ひとくせも二たくせもある婆なんだ。わしは近い

内に、一週間も二週間も續けて會社に泊るやうになるかも知れないよ。お前だつてやり切れないだらう。婆が來てから、三ヶ月間、わしはしよつ中苛々してるんだから」

「これはもう理窟では、どうにもならないことなのね。あたしは、ただあの虱には困るのよ。汚いつたらありやしないわ。氣をつけてあんなに風呂に入れてゐるのに、昨夜も、何氣なく自分のふところをあけてみたら、大きいのが一匹ゐたわ。ぞうつとしちやつたわ」

「しかも、食氣だけは一人前と來てるんだ。配給といふことがてんで判らなくて、こちらがけちけちしてるとばかり思つてるんだ。飯ぐらゐ腹いつぱいに食べさせたつていいだらうと、恨んでゐるんだ。恨んでやると憎まれ口を叩いてるぢやないか。わしの呪ひには間違ひがない、呪つた奴は必ず死ぬと言つてるんだ」

「いつそんなこと言つてて？」

「この間だ、ほら、大宮から、もと婆が下町で使つてゐたといふ松子が來た時に、松子にさう言つたといふんだ」

「若しそれが本當なら、あたしも考へなくちやならないわ。世話をしてやりながら呪はれてゐちや、そんな理窟に合はないことはないわ」

「お前ら姉妹は、何もあの婆にそれほど世話になつてゐないぢやないか。お前も幸子も、自分の力で結婚してるんぢやないか。だからあの婆は、お前らはちやんと結婚式をあげてゐないから、野合だと、今だに厭がらせを言つてるのだ」

「美濃部のところへ、かへしてやりませうか。三ヶ月世話をしたんだから責任は立つわ」

「幸子が何といはうと、仕方がない。はふり出すわけにいかないなら、それ以外の方法はないんだからね」

「幸子たちは、終戰間際に山村に疎開してるんだけど、何もさうさうちが犧牲になることもないわね」

「お前ひとりの婆さんぢやないんだよ。お前はあんまり人が好すぎるんだ」

その結果己の好人物をこつぴどく罰する意志のもとに、仙子はうめ女を、茨城縣下の、今だに電燈のない山村の、農家の二た部屋を借りてゐる美濃部のところへ、荷物のやうに運ぶことに極めた。なんだとかんだと、本人達にとつては切羽つまつた理由を見つけたにしても、内容は厄拂ひして、伊丹家の團欒を回復することが急務であつた。一人の老女のために、主人が二週間も宿直を續けるなど、不合理千萬である。ところで、八十六のうめ女がひとりで汽車にのつて、未知の山村に辿りつくことは常識で考へられず、と言つて、首に荷札をつけて、送りつ放しにもならないのである。若しそれが出來ることなら、どんなに助かることか！　しかしいづれにしても、この度の覺悟については、仙子も節義とか分限の上ではかりとした氣持になれなかつた。そこで、二十歳になる妹瑠璃子に向かひ、

「美濃部や幸子が、いやだと拒んだところで、無理にも押しつけて來るんだよ。伊丹やあたしは、そのために美濃部と喧嘩別れになつてもかまはないんだからね。喧嘩のつもりで、押しつけて來るんだよ」

それは絶對命令であつた。妹は五尺三寸で、骨組も太く、炭俵二俵分にも足りない小柄な祖母を運ぶにはうつてつけであつた。何もそのためにわざわざ大柄に育つたわけではなかつたが、まるでそのためのやうに姉の目に映つたのは事實である。祖母は下駄をはけば、歩くことが出來ず、一町と歩けず、まして驛の橋の上り下りは不可能なので、背負はねばならない。この場合背負ふといふことは、單に肉體の勞力の問題だけにとどまらないのである。若し少しでも若い女の虚榮心といふものを考へてやる心があつたならば、年頃の娘が、汚い八十六の女を背負つた恰好は、同情なしでは眺められないからである。

「お前なんか、お婆さんには隨分世話になつた方だから、それくらゐのことはしてもいいだらう」と仙子は妹に言つた。

ちなみに、仙子達の兩親は早く亡くなつてゐた。そのことが彼女達の最大の不幸であつた。どちらかが殘つてゐたならば、祖母の世話から逃れられたであらう。女三人、男一人だが、弟の啓吉はまだ復員してゐないのだ。たとへ復員してきても、一家をもつ力がないので、啓吉は問題外であつた。仙子は四十三、幸子は三十六である。美濃部はフランス歸りの洋畫家で、三人の子供があつた。終戰の年に東京の家は燒かれ、山村に疎開をしたが、いつ東京に出て來られるか、當はないのである。仙子の家はこの戰爭で損するものは何もなかつた。戰爭中も、ずうつと女中を使ひ、子供はもともとなかつた。疊數や部屋が多いので、戰災者や引揚者の割込みに怯えてゐるが、町會長がうまく報告してくれたので、割當をのがれてゐた。新聞で共産黨や社會黨が、邸宅の解放を叫んでゐるのを見てから、一家は共産黨と社會黨がいつそう嫌ひになつた。

「美濃部もいい加減自分勝手ぢやないの。今までお婆さんの世話をしてゐながら、家が燒けたから、疎開をするからつて、そのためいやなお婆さんをこちらに押しつけていくなんて法はないのよ。死ぬほどの思ひでこの家を燒夷彈から救つたのは、何もお婆さんを引きとるためぢやなかつたのよ。最後まであたし達は東京にふみとどまつてたんぢやないか。並大抵の苦勞ぢやなかつたのよ。だから偶然にたすかつたのを、これ幸ひと、美濃部あたりに利用されちや耐らないわ」

妹は祖母の着換を包んだ風呂敷包をさげ、うめ女を背中に結びつけて、臺所から出ようとすると、仙子が背中にさう言つた。この姉に向かつて口返答は、一切まかりならないのである。うめ女は目を開いて、末孫の背に結ばれてゐるが、仙子の言葉をどう聞いたものか。今さら汽車にのつたり、電燈もない寒い山村に運ばれるなど壽命が縮まるほど辛いことであり、嫌なことだが、嫌であらうと、どのやうに辛からうと、己の運命は孫の手の中に握られてゐる。自分の薄命な生涯についてどう歎いてみたところで、また、仙子の最後の言ひ分に强烈な感銘をうけたにしても、それを表に現すことは出來なかつた。「ほんたうにお婆さんは、癌だわ。お婆さんひとりの